

トゥルークの海賊4

茅田砂胡

Sunako Kayata

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 鈴木理華
設定協力 大利根潮

1

惑星トウルークはもう眼の前だった。

特攻ランバルトは船長席で大きく吼えた。

「きばれ、ぼろ船！」

ここからが最大の難関だった。

超大型船を例外として、宇宙船には本来、地上と宇宙を行き来できる能力がある。

五十年以上前に建造された《アルベルティーナ》でさえ、大気圏突入及び着陸が可能だ。

困難は伴うものの、さほど危険ではない操作だが、今は事情が違った。

後方からは大小の微惑星がひっきりなしに迫り、前方からはミサイルや高射砲が襲いかかってくる。

それだけでなく、二度と戻らないつもりで出港し、

偽グランド・セヴン相手に激しい戦闘を繰り広げた《アルベルティーナ》だ。

大潮でもみくちにされた結果、船体かなりの損傷を受けている。二度と戻らない予定の出港にもこんな自殺行為にも異論を唱えずに、ランバルトの指示通りに飛んだ感応頭脳が淡々と告げてきた。

「船体損傷率24パーセント。——微妙」

気が抜ける最後の呟きは無事に地上に降りられる保証はできないという意味だ。

「ゼロじゃあねえんだな。じゃあ突入だ！」

「了解」

「途中で空中分解だけはするんじゃないぞ！」

「——微妙」

ランバルトの顔が厳しくなった。

五十年以上、この風変わりな頭脳と組んできた。

独特な口調もランバルトにとっては慣れたもので、『阿吽の呼吸』で飛ぶことができる相棒だ。

だからこそよくわかった。この『微妙』がかなり

深刻な『微妙』だということが――。

しかし、このまま大潮が止むのを宇宙空間で待つことはできなかった。

それでは地上の人々に大きな負担を掛けることになってしまふ。彼らの作業の妨げにもなる。

かといって地上の人々に、こちらにかまうなどは口が裂けても言えなかった。彼らの助けがなければ、ひっきりなしに飛んでくる微惑星の大量によって、この船は粉々に砕かれてしまふだろう。

一刻も早く、彼らの邪魔にならないところへ行くべきだった。すなわち地上にだ。

船長席に深く座り直してランバルトは言った。

「地上に降りた時、俺たちが息をしてりゃあいい。

正確に言うならチムニーがだ」

あの少年さえ無事に地上に降ろせばいい。

あの少年だけは死なせるわけにはいかない。

特攻ランバルトは壮絶な覚悟を決めていたが、『アルベルティーナ』の感応頭脳は無情に言った。

「それも微妙」

確約はできないという意味だろう。

しかし、『不可能』とは言わない。

それで充分だった。

ランバルトは低く笑って言ったのである。

「進路と姿勢は維持できるか？」

「ぎりぎり」

「上等だ。行け」

「行く」

昔から頑固で、ちよつぱり物騒で、てんで融通が利かない機械らしからぬ感応頭脳はランバルトには最高の相棒だった。

こんな状態で、本当に大気圏突入に踏み切った。

船を襲う振動がいつそうひどくなる。

大気圏突入には欠かせない衝撃を吸収する機能が正常に作動していないせいなのと言うまでもない。

突入と同時に大気の渦が『アルベルティーナ』の船体を包み込んだ。それは同時に船体を焼き尽くす

凄まじい高熱と衝撃波に他ならない。

船内では数少ない乗員が必死になっていた。

怒濤のように襲いかかる空気抵抗を軽減する作業、さらには大気圏突入速度の維持と船体の姿勢制御に努めているが、この状況ではどちらも非常に難しい。

ひっきりなしに調整を続ける必要があった。

もともと十万吨級と、着陸可能な船の中では、かなり重たい《アルベルティーナ》である。

しかも、特攻ランバルトは防御には無頓着な海賊だった。昔から『肉を切らせて骨を断つ』が彼の得意の戦法だったのだ。

桁外れに頑丈な《アルベルティーナ》だからこそ取れた戦法だが、何事にも限度というものがある。

長い歳月をこの船とともに過ごし、心から愛情を捧げた男たちは最後の力を船に注ぎ込んでいた。

「がんばれ、ティーナ！」

「後少しだ！ 持ちこたえろ！」

言うほど簡単ではない。

船体を焼き尽くさんとする大気と衝撃に加えて、

地上から物騒なものが次々襲いかかってくるのだ。

タルボット村は小麦とミサイルの名産地である。

今日のこの日に備えて蓄えた兵器のありつたけを大盤ぶるまいしているのは間違いない。

降下中の船体のすぐ傍で的確に微惑星に命中し、

物騒な火花を咲かせている。

この見事な手際に船内の男たちは快哉を上げたが、同時に震え上がった。

「ちよつとでも狙いが狂ったら木っ端微塵だぞ！」

「頼むぜ！」

これは地上の人々へ懇願する叫びだった。

彼らは僧侶たちの技倆を知っている。

決して狙いが狂うことはないとわかっているが、

端から見ると砲撃の真っ直中に身を置くのとでは大違いだ。穏やかでいられるわけがない。

僧侶たちがこの船を守ろうとしてくれているのは充分に理解している。いくら感謝しても足りないが、

一つ間違えばミサイルで碎け散った微惑星の欠片かけらが船体に突き刺さりかねないのだ。

その欠片までは地上の人々も手が回らない。

一方、地上からのこの容赦ようしゃない『猛攻撃』に肝きもを潰つぶしたのがもう一人（実は彼女には生身はないので肝もないのだが）いた。

他でもない。《アルベルティーナ》のすぐ後ろを飛んでいたダイアナである。

《パラス・アテナ》は特に損傷を受けてはいないが、《アルベルティーナ》にぴつたりついていないと、地上からの攻撃の的にされそうだったのだ。

結果的にかなり無茶な速度、かなり苦しい姿勢で大気圏に突入する羽目になってしまったのである。

（本当にこれ、避けてくれるんでしょうね!!）

容赦のない攻撃にダイアナは仰天ぎやうてんしていた。

感應頭脳同士の回線で詰問したのも当然だったが、ビーティは感情のない声で平然と応えてきた。

（青色灯の船は撃たない。そういう約束）

感應頭脳しんたうのダイアナが実に器用しやうように舌打ちの音声を表現してみせた。

この言動から推察するにビーティはかなり長い間、惑星トゥルークにとどまっていたのだろう。

だから、トゥルークの事情にも精通しんつうしている。隕石いんせきを除去する僧侶たちの能力を知っている。

機械らしからぬ言葉だが、恐らく彼らを『信用』してもいるのだろう。

しかし、ダイアナにはその歴史がない。

自分の船体からだが破壊される恐れのあるこんな状況で、『あの人たちはわたしを撃たない』と安穩あんゑんとしてはいられないのである。

ダイアナは通常の攻撃衛星や、戦艦の五十センチ砲なら問題にしない。難なく対処できるからだ。

実際に撃たれたらケリーが避けるし、ダイアナは発射装置そのものに干渉して止めることさえできる。どんな強力な兵器に対しても圧倒的優位に立てるわけだが、極端な話、人間の子どもが自分の船体からだに

石を投げてくるのだけは止められないのである。

この攻撃もそれに似ていた。

ダイアナがどんなに懸命に探しても、ミサイルや高射砲を管制している電子機器が見つけれない。

そんなものは存在しないからだ。

恐ろしいことに僧侶たちは肉眼で照準を合わせて、自分の手で発射ボタンを押しているのである。

原始的にも程があるが、その原始的が曲者だった。

この物騒な兵器が電子制御されているなら簡単だ。管制に干渉して砲の狙いを逸らすことも、発射を止めることも可能なのに、この攻撃は防げない。

ダイアナにはやめさせる手段がない。

常に他の人工知能の優位に立ってきたダイアナにとつては非常に忸怩たるものがあつたのだ。

（こんな大物を手動制御で撃つなんて、非常識にも程があるわよ！）

苛立ちのあまり叫ぶように告げると、ビーティはまたもや憎らしいことを言い返してきた。

（トウルークでは常識）

（あなたねえ！）

（ダイアナはうるさい）

（誰のせいよ！）

人間には聞こえない回線で激しく言い争いながら——ダイアナが一方的に罵つていたとも言うが——

二隻の宇宙船は降下を続けた。

その周囲で次々に微惑星が爆発している。

二隻の軌道は既に降下というより落下していると言つたほうが正しいような代物だった。

ただ、《アルベルティーナ》の後方を飛んでいるダイアナにはいやでも気がつくことがある。

（ビーティ。あなた、航行続行は可能なの？）

（微妙）

ダイアナの表情が厳しくなった。

《アルベルティーナ》の乗員たちは慌ただしく——しかし的確に対物防御を展開させることで微惑星の欠片から船を守っているが、それにも限度がある。

事実、ダイアナは前方に対物防御を展開させて、ひっきりなしに飛んでくる《アルベルティーナ》の破片から自分の船体を守っていたのだ。

（空中分解だけはよしてちょうだい。あなたの残骸に直撃されるなんてまっぴらですからね）

（空中分解、しない）

（根拠はあるの？）

（ランバルトが、そう言った）

（だから！ 主語と述語は明確にしゃべりなさい！ 目的語もよ！）

（不要）

普通の感応頭脳らしい言葉で言う「その必要を認めません」と言ったところだ。

ダイアナは（彼女の知覚上の）柳眉^{りゅうび}をきりきり吊り上げながらも、そこは機械らしく、問題説明のための質問を続けたのである。

（ランバルトが何を言ったんですって？）

（チムニーは、地上に降ろす）

はつとなったダイアナだった。

ダイアナはその人物に会ったことはない。

だが、先程「チムニーの母です」と名乗る女性を見た。

ブルズアイジャックの面影を色濃く残す人だった。

（……そこにいるの？）

（いる）

このやりとりの間にも、右に左にミサイルや砲を避ける《アルベルティーナ》の外装は剥^はがれ落ち、構造の一部がむき出しになりつつある。

限界が近づいているのは明らかだった。

しかし、今さらやり直しは利かない。

どうでも地上に降りるしかない。

チムニーは激しい振動に襲^{ひざます}われる船室で跪^{ひざまず}き、一心に祈りを捧^{やみ}げていた。

「……大いなる闇よ。どうかパミール・シオンを、この船で働く人たちを、ビーティを、無事に地上にお降ろしてください」

自分のためには祈らない。

それがトゥルークの僧侶の常だった。

宇宙船には詳しくないチムニーにも現在の状況が非常に厳しいことくらいわかっている。

しかし、ガスやハンクたち、顔なじみの男たちを手伝おうとは思わなかった。

何もできない自分が歯がゆかったが、それ以上に、こんな極限状態で素人が手伝いを申し出ても邪魔になるだけだと知っていたからだ。

あの地下格納庫は村の子どものたちの遊び場だった。チムニーもよく出入りしていた。それでも実際に動き出したビーティに乗ってみるまで、こんなにも大きな船だとは思っていなかった。

「ビーティ！ 頑張つて！」

そんな声思わず洩れるが、周囲の激しい揺れは収まる気配もない。

跪いて礼拝の姿勢を取るのもやっとだった。

固く目をつむって祈った。

（大いなる闇よ、どうか……！）

突然、空気が変わった気がした。

汗にじっとり湿ったチムニーの肌を優しく撫でる心地よい風がふわりと吹き、何かきらきらした光が頭を垂れた頭上から降り注いだようだった。

（大丈夫）

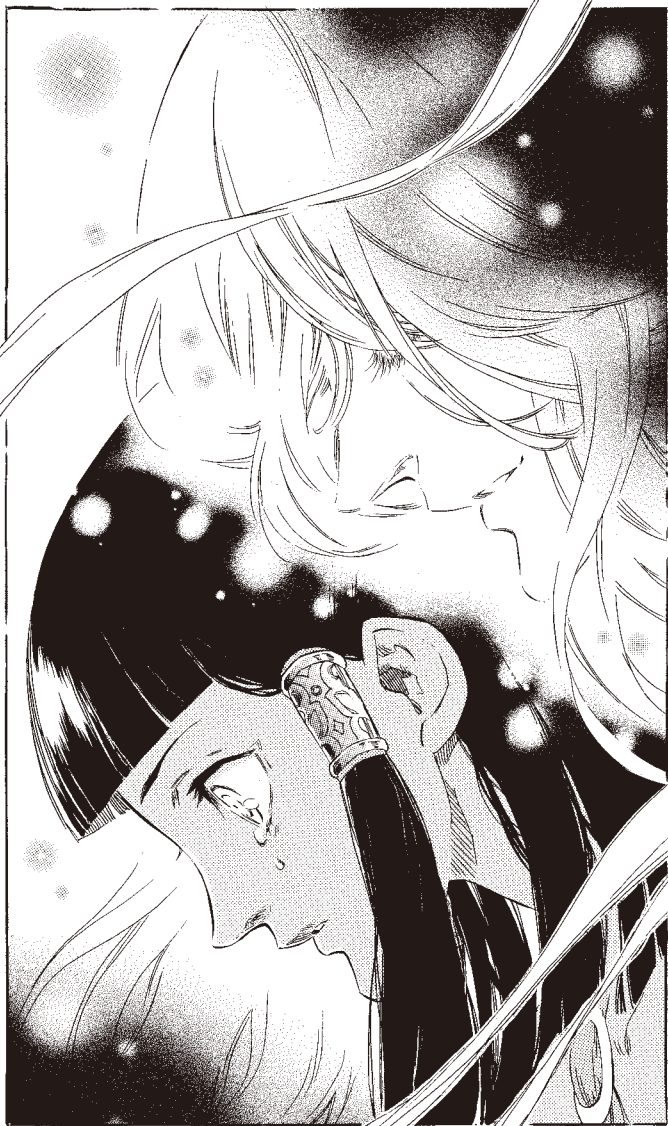
そんな声が確かに聞こえた。

そればかりではない。緊張に強張った肩を優しくあたたかいものに撫でられた気がして、チムニーは驚いて顔を上げたが、もちろん部屋には誰もいない。自分一人が跪いているだけだ。

無意識に立ち上がろうとした時、ひときわ激しい衝撃とともに床が揺れ、チムニーは床に倒れ込んだ。いよいよ最期かと思われる状態だったが、船内の各所で汗だくの男たちが歓声を上げていた。

今の凄まじい衝撃の後、落下速度が明らかに緩くなったからだ。

地上からの補助が間一髪で届いたのである。



PKS

墜落寸前だった《アルベルティーナ》の巨体を、地上の格納庫から伸びた電磁網がしっかりと支え、落下を防いでくれている。

「やったぜ！」

「兄貴！」

男たちはいつせいに彼らの指揮官に声をかけた。

ある意味、ここからが肝心の作業だ。重力圏内で働く電磁網は自動着陸装置とはわけが違う。確実に元の位置に船を戻してくれる機能はない。

それは船を操縦する人間が担当する作業なのだ。

果たして、ランバルトは勇ましく応えたのである。

「おう、後は任せろ。元の格納庫にばっちり収めてやるからよ」

「へいっ！」

男たちは固唾を呑んで彼らの船長に、その操船に自分たちの命運を委ねたのである。

《アルベルティーナ》は重い船だ。特攻ランバルトにできないなら、他の誰にもこの船を地上に降ろす

ことはできないと、彼らは知っていたのである。

部下たちに声をかけたランバルトは相棒に言った。

「ビーティ。舵を寄こせ」

答える前から手動に切り替わっている。

「使える駆動系はどのくらい残ってる？」

「だいたい半分」

誰が聞いても正気ではないと言っただろう。

一つ操作を間違えば村の上に十五万トンの塊が落下してしまう。

だが、老いた海賊は壮絶に笑ったのだ。

「上等だ。最後の大事な仕事だぜ。つきあえや」

「了解」

心なしか楽しげな口調だった。

こんな半身不随の船で地上に着陸するなど、どう考えてもまともではない。しかし、まともではない着陸など、ランバルトは幾度も経験していた。

この格納庫にも何度も降りた。

長年の勘と経験だけを頼りに、恐ろしく大雑把に、

それでいて精密にランバルトは舵を取り、無造作に船を地上に近づけていったのである。

揺れる小麦に、牛や羊が放牧されている牧草地に、不気味なまでに大きな影がくつきりと落ちて離れる。

ランバルトの狙いは的確だった。

電磁網の補助があったことも大きかった。

《アルベルティーナ》の大きな姿は見事に格納庫にすっぽりと収まったのである。

着地の振動を感じて、宇宙より惑星トゥルークで過ごした時間のほうが長い男たちは快哉を叫んだ。

「ありがてえ！」

「大いなる闇に感謝を！」

「《ブルーライトニング》にもだ！」

一同、揃って、叫んだその男を見た。

砲管制を担当しているハンクはもともと《ブルーライトニング》の乗員だった。

ブルズアイジャックを慕ってトゥルークに降り、ジャックが《ブルーライトニング》を凍結した後は

《アルベルティーナ》の乗員として働いていたのだ。

ハンクは老いた顔をくしゃくしゃにしていた。

「もう一度、孫を抱けるなんてなあ……ありがてえ

……本当にありがてえですよ、ジャック」

ハンクの言葉に男たちがいっせいに頷く。

「《ブルーライトニング》に感謝を」

「ああ」

「ブルズアイジャックに！」

厳かな言葉とともに、男たちはつい先程、彼らの盾となつて宇宙に散つた《ブルーライトニング》と、その船長に心からの哀悼の意を表したのである。

やつとのことでミサイルの群れから逃れ、無事に着陸したダイアナはかつてないほど不機嫌だった。

理由はいろいろある。

ケリーとジャスミンが船を降りた後、入念な船内点検を済ませたダイアナは足下の格納庫に収まった宇宙船に向かって皮肉混じりの文句を言った。

(あなた、ずっとここで土竜^{もぐら}みたいに地下に潜っていたの？ 宇宙船のくせに)

(今は塾の先生)

(――塾ですって!!)

ダイアナは驚いた。仰天したと言ってもいい。

話を聞くと、ビーティは村の子どもたちに数学や科学、歴史などを教えているという。

(……どんなお子さんが育つか、寒気がするわね)

(ダイアナは寒くない)

もつともだ。感応頭脳に暑い寒い感覚はないが、ダイアナは器用に舌打ちして見せた。

(今のは言葉の綾^{あや}！ 少しは人間ふうの言い回しを理解しなさいよ)

(してる。ダイアナは寒くない)

今度は菌^{きん}がしりしりになったダイアナだった。

ビーティの主張は正しい。感応頭脳は気温の差を体感することはない。が、そういう問題ではない。

(……地下^{そっち}はどんなふうになっているの。ちよつと

見せなさいよ)

驚いたことに、この距離でもダイアナには地下の様子が探知できないのだ。電子機器に使われている技術が中央のそれとはまったく違っているせいだ。

癢^{しやく}に障るが、同じ機械であるビーティの『目』を通せば地下の様子がある程度見えるはずだった。

(ダイアナが見せるなら、いい)

(あなたからは地上が見えないの?)

(………)

(肝心なところで黙^{だんま}りなのね。――いいわ)

お互い機械だ(たとえどんなにらしくなくても)。そんなわけでダイアナとビーティは互いの探知機を一時的に共有することにした。

ダイアナはビーティの『目』を借りて、ようやく真下にある格納庫内を見ることができたのである。

一方、ビーティにはダイアナが感知している緑の草原や丘が見えているはずだ。

ダイアナは興味を持って地下格納庫を見渡した。

《アルベルティーナ》がすっぱり収まるだけあって、相当に深く広い格納庫だ。他の船の姿はない。

どうやら《アルベルティーナ》一隻を確実に収容するためにつくられた場所らしい。

実は、ダイアナが気にしていたのは自分の船体を支えている遮蔽板の厚さと強度だった。

持ちこたえてくれないと《アルベルティーナ》の真上に落下する。そんなことになったら悲惨などという言葉では表せない。

地下の人間も巻き込む大惨事になってしまう。

それなら離陸すればいいのだが、ダイアナの船外撮影機で確認したところ、草原のただ中に着地した《パラス・アテナ》を取り込むようにして、僧衣を着た人たちの姿が無数にあるのだ。

その人たちは無論、素手ではない。

移動式の小型砲台を操る人、対宇宙船ビーム砲を構える人、様々だ。

迂闊に浮いたらどんなことになるか、ダイアナも

試そうという気にはなれなかった。

(針のむしろってこのことね……)

すると、ビーティが言ってきた。

(ちよつと違う。一難去つてまた一難。もしくは、にっちもさっちもいかない。——が正しい)

(……あなた、妙なところだけ語彙が増えたわね)

そう言いながらビーティの船外撮影機を使って、ビーティの頭上にある遮蔽板を確認してみる。

残念ながら『見る』ことができるだけだ。

遮蔽板を制御している仕組みがどこかにあるはずなのだが、ダイアナにはやはり見つけられない。

忌々しく思いながら問いかけた。

(これ、本当に抜けたたりしないんでしょうね?)

(ダイアナが重い)

(重くないわよ! 五万トン級よ!)

(重い……)

地下格納庫では大勢の人が働いていた。

ほとんどが《アルベルティーナ》の乗組員だが、

技術者らしい人もかなり多い。

その人たちは呆^{あき}れ果てたような驚嘆^{きょうたん}の眼差しで《アルベルティーナ》を見上げている。

「この状態でよくまあ無事に降りてきたな……」

「それ以上によくぞ、ちゃんとここに収めたもんだ。さすがだな、パミール・シオンは」

「ああ、たいしたもんだ」

「異常箇所は、ビーティ？」

ビーティは初めて人間に聞こえる音声で答えた。

「ありすぎ」

周囲の人間ががっくりと脱力する様子が、地上のダイアナにもよく見えた。

心から同情する。

人間たちも、この感応頭脳の独特な言い回しには苦勞させられているようだった。

「傷だらけなのは見ればわかるって」

「損傷がひどいところから順に言ってくれないか」

「パミール・シオンでないと答えないんじゃないか。

呼んでくるか？」

「いや、とにかく目につくところから始めちまおう。それでいいか、ビーティ」

風変わりな感応頭脳は唐突に答え始めた。

「優先順位。機関室、駆動系R5、12、L3、7、10、16、右舷外部探知機破損、左舷後部——」

「わかった、わかった。いっぺんに言うなよ」

「無事なところがあるのかってくらいだな」

技術者の男たちがぞろぞろと船内に入っていく、

格納庫の中は少し閑散^{かんさん}とした空気になった。

そこに新たに一人の男がやってきた。

搭乗口のすぐ傍につくられた通信機の前に立ち、

世間話のような口調で《アルベルティーナ》に話しかけた。

「やあ、ビーティ。久しぶりの宇宙はどうだった」

ビーティは答えない。代わりにダイアナが通信に割り込んで問いかけた。

「失礼ですけど、どちらさま？」

声にこそ出さなかったものの、ダイアナは非常に驚いていた。この男性の顔と姿は推定五十五年前のランバルトそのままだ。

ただし、眼が違ふ。雰囲気がまるで違ふ。

かつて華やかながら抜き身の刃のような雰囲気を持たせ、漂わせた男とまったく同じ顔をしているのに、この男は見るからに明るく屈託がなく、澄んだ青い眼に優しい光を宿し、穏やかな微笑を浮かべている。陽を浴びて健康的にすくすくと育ち、豊かな枝葉を広げた樹木のように温かな人柄を感じさせる。

男性は通信画面に現れた金髪美人に驚いたようで、瞬きして問い返してきた。

「ブライアン・リーヴスだ。そう言うきみは？」

「わたしはダイアナ・イレヴンス。不本意ながら、今はビーティの上にいるわ」

「早く退いてくれないと、潰れる」

人間に聞こえる音声でビーティが言い、また感応頭脳同士の回線でダイアナに言ってきた。

（おしゃべり禁止）

（それってブライアンは自分の出自を知らないから、ランバルトのことは言うなという意味？）

（その意味）

（なぜこんな突拍子もない感応頭脳が誕生したのか、つくづく疑問だわ……）

（それ、棚上げ）

（……あなた本当に変な言葉ばかり覚えてたわね）

人間のブライアンにはこの会話は聞こえていない。心配そうに問いかけてきた。

「見てたよ。もう一隻の青色灯の船だね。そっちは大丈夫かい？」

「故障箇所があるかという質問なら、ないわ。ただ、不愉快なだけよ」

ブライアンはきよとんとなった。

「不愉快って？」

ダイアナはちよつぴり非難する表情になった。

「あなたはトゥルーク人だからわからないのかしら。

あんな物騒な武器にぐりりと取り囲まれて、照準を合わせられているこんな状況で不快感を覚えるなど言われても無理があるわ」

納得して、ブライアンは言ってきた。

「そうか、ごめんよ。トウルーク人の一人として、謝罪する。ただ、できれば彼らを怒らないで欲しい。宇宙から降りてくるものを野放しにはできないんだ。不愉快ならその船を降りて、こっちへ来るといいよ。彼らがきみの船を撃つことはない」と約束する」

「後の約束は信用してもいいけれど、最初の提案は不可能よ。わたしはここから動けないの」

「どうしてだい？ 搭乗口が故障でも？」

「違うわ。ここから動けないのはわたしがこの船の感応頭脳だからよ」

「——感応頭脳だって？」

ブライアンは軽く眼を見張って、通信画面に映るダイアナをまじまじと眺めた。^{なが}どこから見ても若く美しい女性にしか見えない表情豊かな顔をだ。

「本当に？」

「ええ。自分の身体から降りることはできないわ。一刻も早くここから離陸したいところなんだけど、わたしの操縦者も今は船を離れているのよ。仕方がないから彼が戻るまで我慢してあげる」

大いに譲歩して、ダイアナは質問した。

「目下のわたしの最大の懸案事項はわたしの身体を支えている遮蔽板の安全性ね。これが持ちこたえてくれないと、わたしはビーティの真上に落下する羽目になるわ」

「きみの重量は？」

即座に「きみの」と尋ねてくる。頭のいい人だとダイアナは思った。

「基準値で五万一千トンよ。今は加えて約千トンの貨物を積載しているわ」

クインビーのことである。

ブライアンは笑って頷いた。

「それなら大丈夫。問題ないよ。以前はビーティが

そこに載ってたんだから。軽いくらいだ」

「……どうということ？」

ブライアンは手を広げて周囲を示した。

「この格納庫はトゥルーク移民初期の遺産なんだ。

もう五百年くらい前のものだよ。隕石から宇宙船を

守るには地下に隠すしかなかったんだ。——それを

ビーティ用に改造したんだよ。ここが完成するまで、

ビーティはその遮蔽板の上に着陸していたはずだ」

説明して、ちよつと申し訳なさそうに付け加える。

「不安要素があるとしたら、三十数年前の話だから、

耐久性に問題があるかもしれないってことかな」

「それを先に言つてちょうだい」

事実を話してくれるのは嬉しいが、それがあまり

助けになってくれないとは嘆かわしい。

「いいわ。もし足下が崩れそうになったらわたしの

判断で離陸する。共倒れはごめんだもの」

ブライアンは頷いた。

「ぜひ、そうしてくれ。その時はビーティが彼らに

撃たないようにと言つてくれるはずだよ」

「あら、そうなの？」

聞かえているはずなのに、ビーティは答えない。

ダイアナはちよつと声の調子を強くした。

「また黙りなの。そこは『はい』でも『肯定』でも

いいから返事をしなさいよ」

「——思案中」

両手を広げて天を仰ぐ『匙を投げる』仕草をして、

ダイアナはブライアンに尋ねた。

「——この子はあなたたちと親しいみたいね」

ビーティがすかさず否定した。

「『子』じゃない」

「じゃあなんて言うのよ？ 彼女って柄じゃないし、

かといって彼でもないし、あなたも機械なんだから

『この人』というのはもつと変でしょう」

「この感応頭脳」

「言にくいだよ、それは！」

漫才にしか思えないこの二人（？）のやりとりに、

ブライアンが笑いを嚙^かみ殺している。

「言われてみればその通りだ。ダイアナは明らかに女性に見えるのに、ビーティのほうは声を聞いても性別がはっきりしないからね」

ビーティの音声は独特な音調で男性とも女性とも判別がつけにくい。低い女性の声のようでもあり、少し高め男性のようにも聞こえる。

ちなみに本人はこう言った。

「性別、ない」

ダイアナが呆れて言い返す。

「ないのはわかってるわ。わたしだってこれは模造^{シヤム}性格^{キヤラクター}だもの。女性らしく見せているだけよ」

ブライアンが尋ねた。

「きみの操縦者は男性？」

「そうよ。だからわたしは女性性格を模しているの。そのほうが操縦者との連携もうまく行くような気がするからよ」

「そうだね。ただ、その理屈で言うと、ビーティも

女性の性格を取ってもよさそうなもののに、何でやらないのかな？」

独り言^{ひとこと}のようなこの呟^{つぶ}きには答えず、ビーティは見当違いのことを言ってきた。

「空、晴れてる」

ダイアナが質問した。

「あなた、それで外を見たがったの？」

「よく晴れてる。前の時より」

ブライアンがちよっぴり得意そうに胸を張った。

「そうだろう？ 頑張ったからね」

「えらい、えらい」

「いつまでも人を子ども扱いだなあ、きみは」

軽い驚きを示したダイアナだった。

「ビーティは今の自分は塾の先生だと言ったけれど

……ひよつとして、あなたも生徒だったの？」

「そうだよ」

ブライアンは今ほろほろに傷ついた《アルベルティーナ》を感慨^{かんがい}深い眼で見つめて言った。

「ぼくはこの村の出身でね。ビーティとは子どもの頃からのつきあいだ。ビーティはこんなふうになんか変わってるし、取っつきにくいところもあるけど、いい先生だったよ。ぼくが科学に興味を持ったのも、半分はビーティのおかげなんだ」

「あなたは科学者なの？」
サイエンス

「技師でもあるよ。主に網を扱ってる」
エンジニア

この口調から通信や情報網のことではあるまいとダイアナは思い、ブライアンは笑顔で続けた。

「この惑星を守る盾でもある。いくなれば宇宙の掃除屋だね。宇宙空間に力場をつくって、微惑星の破片や宇宙塵を吸着させるんだ。下に落ちてこないようにね。ある程度貯まったら力場を反転させて、宇宙にはじき返すんだよ」
シールド

あつさり話しているが、すごい技術だ。

非常に面倒な、手間のかかるやり方でもある。ダイアナは眼を丸くして指摘した。

「……言うは易し、行は難しの典型よ、それ」
やす
おこな
かた

「ずいぶん難しい言い回しを知ってるんだね」

感心して、ブライアンは首を捻った。
ひね

「他の星には盾に相当するものはないのかい？」
シールド

「少なくとも宇宙塵を集める網代わりに使っている星は他にはないと思うわよ」

「そうなのかい？ 便利なのに」

この電磁網のおかげで惑星トウルクはどんなに微惑星を砕いても、宇宙塵に覆われることはない
おほと説明して、ブライアンは言った。

「その技術を応用して、ビーティを受け止める網をつくったんだよ」

ダイアナはまた軽く眼を見張った。

「——さっきの電磁網は、あなたが？」
ビーコン

「そうだよ。何しろビーティのこの重量だからね。持ちこたえられなかったらどうしようってひやひやしたけど、何とか無事に降ろせてよかった。初めて使うものだったから心配だったんだ」

「初めて？」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。